

どんな時代も生き抜いたシンプルな塗装技術と向き合う

—拭き漆〔摺り漆〕仕上げ—

Look to the Simple Wood Coating Survived in Several Thousand Years, Called *Fuki-urushi*

神谷 嘉美

1. はじめに

塗料は私たちの身のまわりの家具や住宅関連の木材製品をはじめ、金属や無機質材料、プラスチックなどあらゆる分野で使用されている表面化粧材質である。塗料は塗装という工程で数ミクロン～数百ミクロンの塗膜を形成して、美観や触感を与え、腐食・汚れなどから保護する性能を持つ。木材に対する塗料は、昭和30年代から著しく発達した石油化学工業による合成樹脂を主原料とする塗料がその中心となって現在使用されている。では木材に対する塗装技術は、日本においていつから始まったのだろうか。その塗装技術の歴史は古く、縄文時代にまで遡る。現在出土している縄文時代の被塗物には、木胎が腐って失われていても、塗布されていた漆塗膜が残っているという事例も少なくない。このように考えると木材の塗装は、金属やプラスチックに対する塗装技術に比べると、6千年以上に及ぶ長い歴史を持っているといえよう。

近年、環境問題への意識の高まりや健康志向から自然塗料が注目されている。これらは蜜蝋やワックス、乾性油などの天然原料を使用して被塗物の中からだけでなく、塗装の製造時や塗

装工程時においても、環境汚染物質を発生させないようにしている。現代では我々の身近なものでなくなりつつあるが、漆も自然塗料の最たるものである。本稿では約9千年も間、天然の塗料として利用されてきた漆を取り上げ、最もシンプルな「拭き漆〔摺り漆〕」技術に注目したい。漆塗り技術の中でも拭き漆仕上げは、単純でシンプルな塗装技術である。生漆¹⁾液を繰り返し塗布していくこの手法は、木地の調整方法の影響を大きく受ける手法であることから、木地の調整をどうするのかによって塗装工程や最終的な仕上げは多様になってくる。そこで、塗布段階ごとにどのような変化がもたらされるものか観察した結果を報告した後、木地研磨の種類を変化させた場合の表面粗さについて紹介する。

2. 拭き漆〔摺り漆〕仕上げ

数多くある漆塗りの中で下地などの工程を省き、木地の木目の美しさをそのまま表面に見せる素朴なコーティング技術として、木材工芸の分野で伝統的に行われる塗装法の一つである²⁾。針葉樹や広葉樹などの様々な木材に、漆液を薄く塗り重ねていくことで仕上げる技法で、一般的には木材の目止めを行ってから、木地の表面に生漆を摺りこんでいくことが多い。生漆を被塗物に摺りつけるように塗布して、あまり時間を置かずに余分な漆液を拭き取り、その後で硬

2012年3月16日受付
KAMIYA Yoshimi